

高等学校における詩の指導

平 田 顕 久

はじめに

今の高校生には覇気がない、と言われ始めて久しい。われわれの頃にはあれほど楽しかった高校生活があまり楽しそうではない。喜怒哀楽が少なく、自己主張が下手である。高校生活全般についてそうだが授業中はさらにその傾向が強い。

確かに、休み時間は楽しそうに話している光景も目にするが、その話している一緒にいる相手が嫌で、クラス替えを望んでいる子どもさえいる。彼らのおしゃべりは本当にコミュニケーションなのだろうかと思うこともある。自分が考えた何かを伝えたり、感じた何かをわかってもらおうとしたり、そういう工夫や努力をすることが、今の子どもは著しく下手であり、他人の心に入り込むことに慎重すぎるほど慎重でもある。だからといって、彼らはけっして自己表現や他人とのコミュニケーションを拒んでいるのではない。現に、われわれの高校や大学の頃の話には目を輝かせて耳を傾ける。

そんな彼らに何かをつかませたい。言葉をきっかけに自分達の生活を豊かなものに変えていく力をもたせたい。そのために詩を

教材として使いたい。そんな願いを基に詩の指導についての考えをまとめてみたい。

一、詩の指導の狙い

詩の指導の狙いは次の三点が考えられる。

a ものの見方を豊かにする。

b 感性を育てる。感じ方を豊かにする。

c 詩的感動を味わわせる。

a と b、c の関係については、何が詩の指導の中心的狙いであるかを軸に、いろいろな考え方があろうだが、そのことについて論じるのが本稿の目的ではない。ただ、詩の教育的機能の明確さを追求することによって詩の方法を部分的に理解させようとする試みよりも、詩をまるごと味わわせて伝える詩的感動を前提として詩の指導を考えて行きたい。何よりも「詩っておもしろいな」という気持ち、「これが詩がわかるということかな」という実感（おそらくそれを詩的感動と呼ぶのだろう）を大切にすることを指導したいと考えている。

二、詩の指導の課題

a 学習者にとって詩的感動とは何か

学習者にとって詩とは何なのか。詩的感動とは何なのか。これよりも根本的な問題である。非常に曖昧な言い方を許してもうらえば、「ああこれが詩なのか」と、ある種の驚きと、発見の喜びを感じるのが詩的感動ではないかと思う。「自分はこんな感じ方をするのか」という、自分自身の感性の発見でもある。

もう少し厳密に定義するとすれば、詩的感動の独自性は、文学教材の感動の特性を突き詰めたものだと考えていいと思われる。

詩教材の主題（小説の主題というような意味で）と表現的な特徴（言葉の響き・リズム・イメージを喚起する力等）とが不可分の形で学習者にとらえられたとき、学習者が詩と出会った、詩的感動を味わったと言えるのである。

そうした詩的感動のあり方は、さらに一つ一つの詩教材によって微妙に異なる。そこに詩の授業の難しさもある。

しかし詩の授業を考える際には、個々の詩教材の詩的感動を、その詩教材の特性を中心に、十分把握しておかなければならない。

b どういう授業を組織するか

何を狙ってどういう授業を組織するか。何を狙うかはいうまでもなく詩的感動を味わわせることなのだが、そのために学習者を詩教材と向かわせて具体的にどうさせることが「学習」になるのか。大きく考えて次の三つの形があると思われる。

① 学習者自身が感じ、考え、言葉に表現してみる。

② 優れた鑑賞・解説を読み、聞く。

③ 他の学習者の感じ方を聞く。

この①②③の活動を組み合わせて授業を組織していくことになる。

それぞれ詩教材の特性や学習者の実態、授業者の狙いなどいろいろなバリエーションが考えられうるであろうし、また考えられなければならない。軸になるのは、やはり個々の詩教材独自の詩的感動のあり方であり、それを生み出している詩の特性（方法）である。

どういう授業を組織するかということ以前に、重要だと思われるのが、普段の「国語の授業」の雰囲気である。学習者一人一人がお互いに関心を持ち、お互いの言葉に素直に耳を傾けるような姿勢が育てられていなければ、詩の授業を組織することは大変むずかしい。

c どういう詩教材を用いるか

I 教科書教材の可能性と限界

教科書教材は、教材としての検討を十分経ているという点で、その価値は特にその主題的な面が高いとも言えるが、反面、近代詩教材を中心に、今日の学習者の言語生活や生活体験そのものと大きくかけ離れていたり、新鮮さに欠けるといって、教材としての価値に疑問のあるものも少なくない。授業者としてはそれが教科書に載っているからという理由ではなく、主体的な教材価値の捉え直しを行ったうえで授業に臨むべきであることは言うまでもない。

もないが、学習者の現実と照らし合わせて、「この教材は学習者の心を何らかの意味で揺さぶる力を持っているか」と問いかけたとき、おのずと教科書教材には限界がある。

もちろん、さきに述べたように、どのような学習活動を軸にどのような授業を組織するかによって、最大限にその詩教材の教材価値を引き出す余地はあるわけだし、その点に教科書教材の可能性もある。

だが、学習者に感じさせ、考えさせる魅力が少ないことは、教材としては致命的である。

Ⅱ 投げ入れ教材の魅力

教科書教材が必ずしも学習者にとって魅力あるものでないことと、同時に授業者にとっても魅力あるものでないことに比べると、投げ入れ教材には魅力がある。学習者の現実を考えて、授業者が主体的に選べるという点が最大の魅力である。

また、投げ入れ教材自体の教材的価値だけでなく、単独では魅力の少ない教科書教材の価値を高めるような働きを期待することもできるだろう。

したがって、学習者の現実を考慮に入れながら、学習者にとって魅力のある教材を発掘する不断の努力が、常に授業者には求められるのである。もっともこれは詩教材に限ったことではない。

三、詩の授業の試み

このような観点で詩の指導を考えている自分が行った詩の授業

の中で、何らかの成果を納めたのではないかと思われるようなものについて、若干報告したい。

a 「シジミ」(石垣りん)の授業

「シジミ」という詩の特性は次の三点が押さえられると思われる。

1、日常的な言葉に詩的な言葉を織り込む形で、日常的な出来事が描かれている。(素材の特性)

2、出来事の時間的推移にそって展開されている。(展開の特性)

3、日常的な出来事の中で「私」のイメージと「シジミ」のイメージの重なりによって、詩人の生活認識を表わしている。

(詩情の特性)

こうした詩の特性を押さえて、授業を構想する際、次のような点を読みポイントになると考えた。

I 日常の出来事として読み取らせる。

① 「口をあけて生きていた」シジミのイメージを押さえさせる。(具体的にどんな視覚的イメージなのか、あるいはどういう感じを抱かせるイメージなのか)

② 「夜が明けたら ドレモコレモ ミンナクツテヤル」が誰の言葉なのかを押さえさせる。

③ 「鬼ババの笑いを私は笑った」の意味を押さえさせる。(誰のどういう笑いなのか)

④ 「うっすら口をあけて寝」る「私」のイメージを押さえさせる。

Ⅱ 「私」の気持ちの変化(ある発見)と、そこに表われる詩人の認識を読み取らせる。

⑤ 「シジミ」に対する「私」の思いをpushさせさせる。(どういう思いで「ドレモコレモ ミンナクッテヤル」と言ったのか)

⑥ 寝ている「私」のイメージと「シジミ」のイメージが重なることに気づかせる。

⑦ 「それから先は うっすら口をあけて 寝るよりほかに私の夜はなかった」という「私」の思いを考えさせる。

こうした読みのポイントの中でも、詩的感動をつかませるキーポイントは、「私」が「ドレモコレモ ミンナクッテヤル」という「シジミ」のイメージと、うっすら口をあけて寝る「私」自身のイメージとの重なり気づかせる⑥だと考えた。

そこで、その⑥を軸に、読みのポイントがバランス良くpushさせられるために、この詩を漫画にさせてみる(あるいは漫画の構想を立てる)という方法を取ってみた。(資料1参照)

授業の中で描かれた学習者の漫画(資料2)を見ると、彼らが彼ら自身の感性で、詩と出会っているのがよくわかる。またこれらの漫画は、授業の中で自分の感覚だけでは詩と出会えなかった学習者にも詩との出会いを助ける働きをしたことは言うまでもない。

b 「初恋」(吉原幸子)の授業(資料3)

この詩の特性は次の三点がpushせられよう。

1、日常的な言葉を用いて、暗示的な意味を含ませながら日常的な出来事を描いている。(素材の特性)

2、一見時間的推移通りの展開のように見えて、実は三・四連と九連は時間が異なっている。(展開の特性)

3、二人の女の子の心情を通して詩人の人間観が表われている。(詩情の特性)

こうした特性をpushさせて授業を構想するとすれば、3の前提として、1・2の素材の特性、展開の特性をpushさせて、どのような詩的世界として捉えるかが最初のキーとなる。基本的な詩的世界の捉え方として、大きく次の二通りが考えられる。

①いつまでも仲良しでいようと約束しあっている二人の女の子がいた。一人の女の子に好きな男の子ができた。男の子もその女の子の気持ちを察してか、しきりにかまってからかう。いじめる。見かねたもう一人の女の子が黒板に書く。「オコラナイノデスカ ナクダケデスカ」。もう一人の男の子を好きな女の子は微笑みながら、その「カ」を消す。「オコラナイノデスカダケデス。だって好きななんだから」。

②同じ一人の男の子を好きな二人の女の子がいた。その一人が相手の男の子にも好意をもたれた。気のあるその子(男の子)はからかう。いじめる。自分だけ好意をもたれたその女の子はもう一人の女の子に「オコラナイノデスカ ナクダケデスカ」と聞く。もう一人の女の子は黙って微笑みながら「オコラナイノデス ナクダケデス。だってあなたは大事な友達だもの」。

①②のとらえ方の違いは「おなじ夢への さびしい共犯」の読み方の違い、黒板に「オコラナイノデスカ・・・」と書いた女の子が、キスを盗まれた子かそうでないかなどの読み方の違いなどから生まれる。

したがって授業のポイントとして次のような点が考えられる。

* 「おなじ夢への さびしい共犯」とはどういう意味か。

* 「ほほえみだけは ゆるせなかった おとなになるなんて つまらないこと」は、だれのどんな思いの込められた言葉なのか。

* 黒板に「オコラナイノデスカ・・・」と書いたのは、キスを盗まれた女の子なのか。

こうした点を押さえながら「どういう初恋に対するどういう思いを歌った詩なのか」を考えさせていく。

自分の授業では、五行目の「ひとり」をA、六行目の「ひとり」をBとして、以下の「ひとり」をA・Bのどちらか考えて、それをもとに詩の世界を物語風にまとめ、話し合うという展開を取った。正解を求めるといふ形ではなく、活発な話し合いを通して、学習者一人一人が自分なりに詩的世界を完成させることに留意した。

その過程で学習者に自分自身の感じ方・考え方を発見してもらいたいという狙いであった。この詩のように、詩の言葉の読み方の幅からいくつかの解釈の可能性が生まれてくる詩（パズルを解くように学習者に考えさせる力を持つ詩）の場合、言葉に遊ぶと

いった感じの授業であっていいのではないかと考える。（資料4の「出会い」の詩もそういう使い方ができる）現在の学習者の実態を見たとき、自分の感じ方考え方を知りそれを言葉にして人に伝えるということがいかに重要なことかを痛感するからでもある。

最後に授業自身の読みについて話して授業のまとめとした。学習者の中には正解が与えられないことに不満を示すものもいたが、逆に自分なりに考えたことに対する満足感の方が大きかったものが大多数であったと思っている。

終わりに

日々教卓の前に立つ者として、詩の指導を通して学習者に期待するのは、学習者自身の感性の発見であると改めて思う。「自分が何に心を震わせるのか」「自分は何を美しいと感じるのか。何を素敵だと思ふのか」そんなふうに自分自身を見つけることの向こうに、「生きる力」の再生もあるような気がする。雑務に忙殺される毎日だが、彼らの笑顔を糧に、新しい教材を、授業者自身の詩との新しい出会いを求め続けていきたい。

（広島市立沼田高等学校教諭）

資料 ①

「シジミ」学習プリント（ ）年（ ）組 氏名（ ）
（ ）（ ）コマ漫画シジミ

--	--	--

▽詩のどのことはまでがどのコマに入りますか。

▽どんな絵になるでしょうか。（何のどんな様子を書きますか）

▽全体として何をあらわそうとする漫画になりますか。

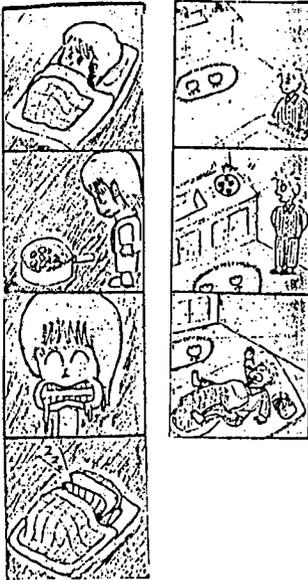
資料 ②

シジミ 石垣 りん

夜中に目をさました。
ゆうべ買ったシジミたちが
台所のすみで
口をあけて生きていた。

「夜が明けたら
ドレモコレモ
ミンナクッテヤル」

鬼ババの笑いを
私は笑った。
それから先は
うっすら口をあけて
寝るよりほかに私の夜はなかった。



資料 ③

初恋

吉原 幸子

ふたりきりの教室に 遠いチンドン屋
黒板によりかかって 窓をみてゐた

女の子と もうひとりの女の子
おなじ夢への さびしい共犯

ひとりはいま ちがふ夢の 窓をみてゐる
ひとりは今 もうひとりのうしろ姿をみてゐる

ほほゑみだけは ゆるせなかった
おとなになるなんて つまらないこと

ひとりが いたづらっ子に キスを盗まれた
いたづらっ子は そっぽをむいてわらった

いたづらっ子は それから いちめっ子になった
けふは菌をむいて「キミ ヤセクナ」といった

それでひとりは 黒板に書く
オコラナイノデスカ ナクダケデスカ

ひとりはまだまって ほほゑみながら
二つの「カ」の字を 消してみせた

うすい昼に チンドン屋のへたくそラッパ 急に高まる

資料 ④

出 会 い

吉原 幸子

□□□の底に ひそかな傷があるように
となりの□□□にも かなしみがある
だから□□□たち ほほゑみあえる

あるときは 二十年まえの□□□と
二十年のちの□□□に囲まれて歩く
□□□はひとり

□□□もひとり
それでも 次の柱のかげで
□□□は□□□に

激しく出会うかもしれない
電車はいつも
過去から未来へと走っている